

3大学連携協力協定締結記念特別展示

「ボアソナードとその教え子たち」の記録

年史編纂室

2019年6月1日から7月20日まで、関西大学博物館特別展示室において3大学連携協力協定締結記念特別展示「ボアソナードとその教え子たち」を開催した。本展示は、2017（平成29）年9月に本学と法政大学、明治大学が連携協力協定を締結したことを記念し、その連携事業の一環として、年史編纂室が法政大学史センターおよび明治大学史資料センターと共催したものである。巡回展として実施した本事業は、下記の日程で明治大学、法政大学での展示を終えており、関西大学における展示が最後の巡回となった。

【明治大学展】

2018年7月7日～8月5日

明治大学駿河台キャンパス 明治大学博物館特別展示室

【法政大学展】

2019年2月23日～4月22日 法政大学市ヶ谷キャンパス

ボアソナード・タワー14階 博物館展示室 および外濠校舎

6階展示室

ごあいさつパネル

関西大学展では、ボアソナードならびにその教え子である大学創立者たちの関係資料と解説パネルの巡回展示に加え、新たに「3大学のあゆみ」コーナーを設けた。以下ではコーナーごとに展示内容を紹介する。

ごあいさつ

「日本近代法の父」と讃えられるギュスターヴ・エミール・ボアソナード（Gustave Émile Boissonnade de Fortarable, 1825-1910）は、1873（明治6）年、明治政府の法事顧問として来日し、1895（明治28）年に帰国するまで、20年以上にわたって日本における近代法典の発展に多大な貢献を果たしました。

法政大学、明治大学及び関西大学の前身を立ち上げた創立者たちは、いずれも1870-1880年代に、ボアソナードの教えと支援を受けています。1880年当時、日本には政治や法律を議論するための多くの結社が立ち上がっていました。「身分」というものを持たなくなった市民たちが、憲法の制定と議会の開設を求めて盛んに読書会を開き、議論し、あるいは演説会を開催したのです。その自由民権運動の熱気のなか、権利の意識にめざめた当時の人びとは法律の知識を求めていました。それに応えるために創立者たちはそれぞれの学校を運営し、教育にあたり、井筒活動をおこなったのです。以降、3大学は、時に競い時に協力し合いながら、近代法の整備と普及のために、ひいては近代日本の社会制度構築のために尽力し、その中から数多くの人材が輩出しました。

ボアソナードは、その新しい社会を創り上げようとする日本人の熱意を変えていました。司法省法学校などでボアソナードの書籍に接した教え子の多くはやがて司法官や法学者となり、法典編纂・法律実務にも従事し、あるいは在野法曹として、人々の力となっていくのです。

このたび、3大学の連携協力協定が締結されたことを記念して、ボアソナードの事績と、その支援によって日本の社会を変えていった人々、そして彼らが創立した3大学の活動を振り返り、世界史的観点からその意義を改めて考える機会といたします。

ごあいさつ

「いあこやひ」

「日本近代法の父」と讃えられるギュスターヴ・エミール・ボアソナード (Gustave Emile Boissonade de Fontarabie, 1825-1910) は、1873 (明治6) 年、明治政府の法律顧問として来日し、1895 (明治28) 年に帰国するまで、20年以上にわたって日本における近代法典の編纂に多大な貢献を果たしました。

法政大学、明治大学及び関西大学の前身を立ち上げた創立者たちは、いずれも1870-1880年代に、ボアソナードの教えと支援を受けています。1880年当時、日本には政治や法律を議論するための多くの結社が立ち上がっていました。「身分」というものを持たなかった市民たちが、憲法の制定と国会の開設を求めて盛んに読書会を開き、議論し、あるいは演説会を開催したのです。その自由民権運動の熱気のさなか、権利の意識にめざめた当時の人びとは法律の知識を求めていました。それに応えるために創立者たちはそれぞれの学校を運営し、教育にあたり、弁護活動をおこなったのです。以降、3大学は、時に競い時に協力し合いながら、近代法の整備と普及のために、ひいては近代日本の社会基盤構築のために尽力し、その中から数多の人材が輩出しました。

ボアソナードは、その新しい社会を創り上げようとする日本人の熱意を支えていました。司法省法学校などでボアソナードの警咳に接した教え子の多くはやがて司法官や法学者となり、法典編纂・法律実務にも従事し、あるいは在野法曹として、人々の力となっていたのです。

このたび、3大学の連携協力協定が締結されたことを記念して、ボアソナードの事績と、その支援によって日本の社会を変えていった

人々、そして彼らが創立した3大学の活動を振り返り、世界史的な観点からその意義を改めて考える機会といたします。

一 ボアソナードの事績

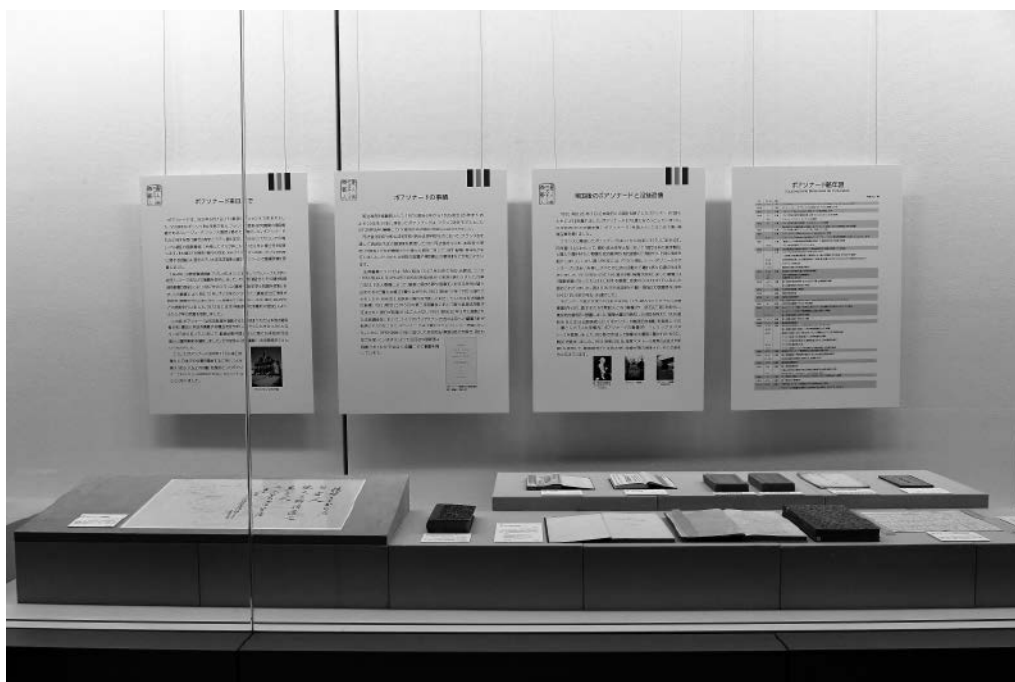
「ボアソナードの事績」解説パネル

ボアソナードが生まれてから法学者となって来日し、数々の事業に携わって帰国後に逝去するまでの経歴を、関係写真とともに紹介した。

「ボアソナード来日まで」

ボアソナードは、1825年6月7日、パリ東郊ヴァンセンヌで生まれました。父は高名なギリシャ碑文学者であり、フランスの教育・研究機関の最高権威であるコレージュ・ド・フランス教授も務めた人物でした。ボアソナードも父の学才を受け継ぎ古典学とラテン語を学び、1845年にバカロレア (中等レベル認証の国家資格) に合格してパリ大学に入学、1852年に博士号を取得します。博士論文『夫婦間の贈与の歴史、およびナポレオン法典における同制度に関する試論』は、翌年のパリ大学法学部博士論文コンクールで最優秀賞を受賞しました。

1864年には教授資格試験 (アグレガシオン) に合格してグルノーブル大学に赴任し、ローマ法などの講義を担当しました。その間『遺留分とその精神的経済的影響の歴史』により1867年のフランス (精神・政治学) 学士院賞を受賞します。この業績により同年10月、パリ大学のアグレジェ (講座担当正教授が病気等で講義を休んだ時に代わって授業を行う者) となり、刑法、憲法、経済学などの授業を行いま



ボアソナードの事績

した。1872年には『生存配偶者の諸権利の歴史』によりふたたび学士院賞を受賞しました。

この頃、ボアソナードは司法制度を調査するため派遣された日本政府関係者8名に憲法と刑法を講義する機会を持ちました。そのことがきっかけとなり、1873年6月、パリにおいて、鮫島尚信弁理公使との間で日本政府（司法省）との雇用契約を締結しました。その内容は、法典編纂と、法学教育を行うというものでした。

こうしてボアソナードは同年11月に来日を果たし、日本での仕事を開始するに至り、「人ヲ害スル勿レ」（左上の印鑑）を原則としたボアソナードのフランス自然法が日本にもたらされることになりました。

写真1 ヴァンセンヌ市庁舎

「ボアソナードの事績」

明治政府法律顧問として、1873（明治6）年から1895（明治28）年まで、およそ22年間、日本に滞在したボアソナードは、フランス法をモデルとした近代的諸法典の編纂とそれを運用する法律家の育成に心血を注ぎました。

司法省法学校や和仏法律学校・明治法律学校などにおいて、フランス法を通して西欧近代法の諸原理を教授したほか、司法省をはじめ、太政官・元老院・外務省など政府機関からの様々な諮問に対して、助言・献策・答申などを行いました。とりわけ、元老院の設置や拷問廃止の意見書などが知られています。

法典編纂については、1880（明治13）年7月公布の刑法・治罪法、ついで1890（明治23）年4月公布の旧民法（財産法部分）の

起草に携わりました。刑事二法は、日本人委員によって、皇室に関する罪や国事犯に対する死刑が盛り込まれるなど重大な修正を蒙りながらも、1882（明治15）年1月から施行されましたが、旧民法は、延期派と断行派が激しく対立した、いわゆる法典論争の結果、1892（明治25）年5月の第三帝国議会において施行延期法律案が可決されて、施行が延期されることとなり、1893（明治26）年3月に設置された法典調査会において、ドイツのパンデクテン方式の採用へと編纂方針が転換されたのをうけて、ボアソナードは、失意のうちにフランスへ帰国しました。しかし、1898（明治31）年に成立した明治民法（家族法部分を除き、現在も効力を保っています）によって旧民法の諸原理は根絶されたわけではなく、全編にその影響を残しています。

写真1 ボアソナード起草日本民法草案第1巻表紙（1880年）

「帰国後のボアソナードと没後追懷」

1895（明治28）年3月、日本政府との契約も終了したボアソナードは娘とともに、日本を離れました。ボアソナードは70歳になろうとしていました。日本政府はその功績を讃え、ボアソナードに外国人としてはじめて勲一等瑞宝章を贈りました。

フランスに帰国したボアソナードはいったん住まいをパリに定めます。同年夏、2回にわたって、精神・政治学学士院において「現代日本の進歩瞥見」と題した報告を行い、物質的、政治経済的、知的道德の三側面から、日本の現状を紹介しました。しかし翌1896年には、パリから南仏コート・ダジュールのアンチーブに住まいを移し、すべ

ての公的な活動から離れ、悠々自適の生活を送りました。1910（明治43）年3月、富井政章、梅謙次郎宛に送った書簡には「高齢病軀となっても、日本に対する親愛と忠実の心は失われていない」と認められていました。翌4月16日日本政府から勲一等旭日大受賞授与。同年6月27日、当地で死去。85歳でした。

ボアソナード逝去を受けて日本では同年11月、教え子たちを中心に追懷事業が行われ、教え子たちが発起人となり胸像（作 武石弘三郎）を制作し、東京地方裁判所に設置しました（関東大震災で焼失）。25周年忌を控えた1934（昭和9）年には、日仏関係者により「ボアソナード教授記念事業」を実施し、その一環としてパリ大学構内にボアソ



ボアソナードの事績 展示資料

ナードの胸像（作 フェリックス・ベヌトー）を除幕しました。同じ型で作成した胸像は大審院に置かれたものの、戦災で焼失しました。1953（昭和28）年、再度ベヌトーの原型（法政大学所蔵）を使用して、最高裁判所と法政大学に胸像が復元設置され、その功績を今に伝えています。

写真1 勲二等旭日大綬章をつけたボアソナード（1910年）

写真2 ボアソナード墓所

写真3 ボアソナード胸像（法政大学）

「ボアソナード略年譜」

「ボアソナードの事績」展示資料

ここではボアソナードにかかわる資料を展示したが、資料は全て法政大学ならびに明治大学所蔵のものであるため紹介を割愛する。主な展示資料は法政大学史センター所蔵「ボアソナード胸像原型」「ボアソナード肖像画」、明治大学史資料センター所蔵「井上操の講義ノート」である。なお本稿では原則的に関西大学担当分のみ掲載し、以降の解説パネルおよび展示資料の紹介においても同様とする。

二 3大学の創立者

「関西大学の創立者」解説パネル

司法省法学校などでボアソナードの教えを受けた者たちが3大学の創立に携わっていることから、3大学の創立期ならびにボアソナードとの関係について、写真とともに紹介した。

「関西大学の創立」

1886（明治19）年11月4日、関西大学の前身である関西法律学校は大阪西区京町堀の願宗寺を校舎として開校しました。法学教育の必要が説かれる中で生まれた、関西初の本格的な法律学校です。開校したばかりの校舎には「法学生徒募集」の新聞広告を見た若者が集まり、願宗寺は瞬く間に受講生で溢れてしまうほどであったといい、法律学校の設立に対する当時の関心の高さが伺えます。

学生数の増加にともない、関西法律学校は東区淡路町の仮校舎、北区河内町の興正寺を経て、1903（明治36）年に創立後初めての自前校舎である江戸堀校舎を竣工させました。ところが、その敷地が市電の予定路線に含まれたため3年後には移転を余儀なくされ、1906（明治39）年、大阪北区上福島の新学舎へ移りました。その間、関西法律学校は1904（明治37）年に専門学校令による専門学校として認可され、1905（明治38）年には「私立関西大学」と改称しました。

さらに1922（大正11）年には大学令に基づき関西大学として認可されるとともに現在の千里山学舎に移転し、法学部と商学部、大学予科が設置されました。その後も関西大学は発展を続け、現在では4キャンパスに13学部を擁する総合大学となっています。

写真1 創立時の校舎・願宗寺

写真2 千里山の大学本館（1927年竣工）

「ボアソナードの弟子たち～関西大学の創立者～」

関西大学では、児島惟謙をはじめとする12名を創立者としています。



関西大学の創立者

その多くは法学教育という時代の要請を見極めた法曹界の俊英たちでした。創立には、自由民権運動の活動家であり初代校主となった吉田一士の働きかけのもと、当時大阪控訴院長だった児島に加えて大阪始審裁判所長だった大島貞敏、実業家の土居通夫による後援が得られました。

司法、財界の重鎮として名誉校員にもなった彼ら3人のほか、学生への教育においてとくに重要な役割を果たしたのは教壇に立った講師であり、その多くがボアソナードの教え子でした。12名の創立者のうち司法省法学校でボアソナードから直接指導を受けたのは小倉久、鶴見守義、井上操、手塚太郎、志方鍛の5人です。彼らは現役の司法官として公務のかたわら講義を行い、法学普及に励みました。なかでも井上操は司法省きつての秀才とも呼ばれ、ボアソナードの『性法講義』を翻訳しています。

また、堀田正忠はボアソナードの住み込み書生として熱心に法学を学び、他の創立者と同じく司法官でありながら「ボアソナード門人」という肩書きを持っていました。ボアソナードの薫陶を受けた彼らが創立期の教壇に立ったことで、ボアソナードの思想や理念が関西法律学校に受け継がれたといえます。

写真1 小倉久

写真2 井上操

写真3 堀田正忠

写真4 志方鍛

「関西大学の創立者」展示資料

本学の創立者である志方鍛、小倉久、鶴見守義の関係資料を展示した。

「志方鍛の司法省法学校入学辞令」

1876（明治9）年 関西大学年史編纂室所蔵

志方（萩原）鍛は司法省法学校の第2期生として入学し、ボアソナー
ドらのフランス法を受講しました。

「志方鍛の司法省法学校卒業式案内通知」

1884（明治17）年 関西大学年史編纂室所蔵

司法省法学校で普通学4年と法律学4年を学んだ志方鍛の卒業式案内通知です。「羽織袴またはブロックコート及び靴」を着用すべきことが記されています。

「志方鍛の司法官任命辞令」

1884（明治17）年 関西大学年史編纂室所蔵

志方鍛は、1884（明治17）年7月12日に判事補に任じられ晴れて司法官となり、のちに創立期の関西法律学校で講師を務めることとなりました。

「小倉久が愛用した文房具」

明治時代 関西大学年史編纂室所蔵

関西法律学校創立者の一人で初代校長の小倉久が愛用した文房具です。（筆床、筆洗い、ペーパーナイフ、巻紙置き、硯盆、筆立て）



法政大学の創立者



明治大学の創立者

「小倉久旧蔵写真アルバム」

明治時代 関西大学年史編纂室所蔵

関西法律学校創立者の一人で初代校長の小倉久が所蔵していた写真帖です。中には名刺判写真を4枚ずつ収める台紙が32ページ綴じられていて、現在は107枚の写真が所収されています。

「小倉久旧蔵ルイ・ヴィトン製トランク」

1872年製造 1884年販売 関西大学年史編纂室所蔵

小倉久が、1884年ポルトガルのリスボンで開かれた万国郵便会議に出席した際に、フランス・パリのルイ・ヴィトン本社で購入したものです。

「大礼服」

明治時代 関西大学年史編纂室所蔵

関西法律学校創立者の一人である鶴見守義が、宮中の重要な儀式の際に着用した大礼服です。上着のポケット内に「E.B.38」とあることから、1905（明治38）年2月に調製されたと考えられます。また、収納するための皮製トランクには鶴見のイニシャル「M.T.」が刻印されています。

三 3 大学の講義録・卒業アルバム・卒業証書

明治大学展、法政大学展の内容を發展させ、三大学が持つ創立期から旧制大学期までの講義録と卒業アルバム、卒業証書を比較展示した。このコーナーでは解説パネルを設けず、資料を展示するに収めた。

「関西法律学校講義録」

1887（明治20）年～1888（明治21）年 関西大学年史編纂室所蔵
選ばれた学生が授業を記録し、担当講師による検閲を経て順次出版されました。一般にも広く販売され、授業を受講できない人たちにも重用されました。（山野博史氏寄贈）

「東次郎講義筆記」

1886（明治19）年 関西大学年史編纂室所蔵
関西法律学校が司法省の許可を得て正式開校となった、1886（明治19）年12月13日の手塚太郎講述「法律大意講義」が収められています。

「小岸安昌講義筆記」

1888（明治21）年 関西大学年史編纂室所蔵
関西法律学校の第1回卒業生・小岸安昌による講義筆記です。鶴見守義口述「仏蘭西民法契約篇講義筆記」、手塚太郎口述「佛国民法第拾四卷保証篇講義筆記」などが残されています。

「私立関西大学商業科卒業アルバム」

1909（明治42年）年 関西大学年史編纂室所蔵

「私立関西大学商業科卒業アルバム」

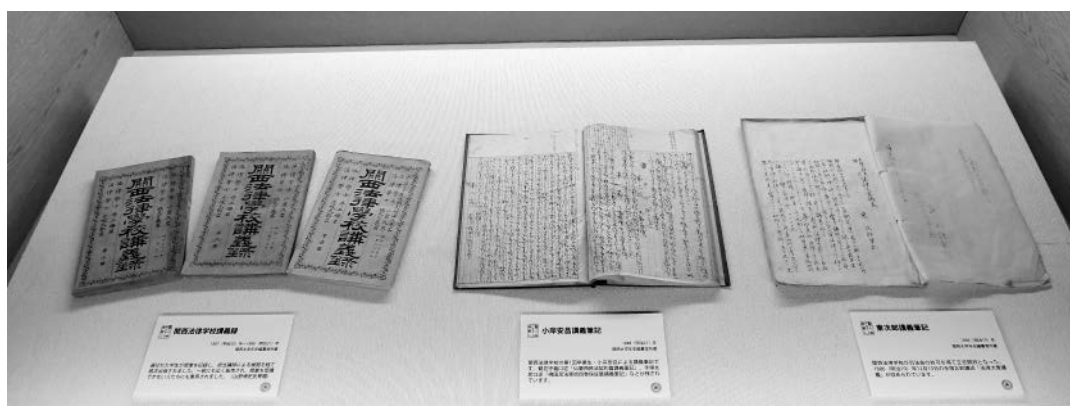
1910（明治43年）年 関西大学年史編纂室所蔵
表紙には第22回卒業生であることを示す数字「22」と1910（明治43）年に観測されたハレー彗星が描かれています。

「関西法律学校 第1回卒業生卒業証書」

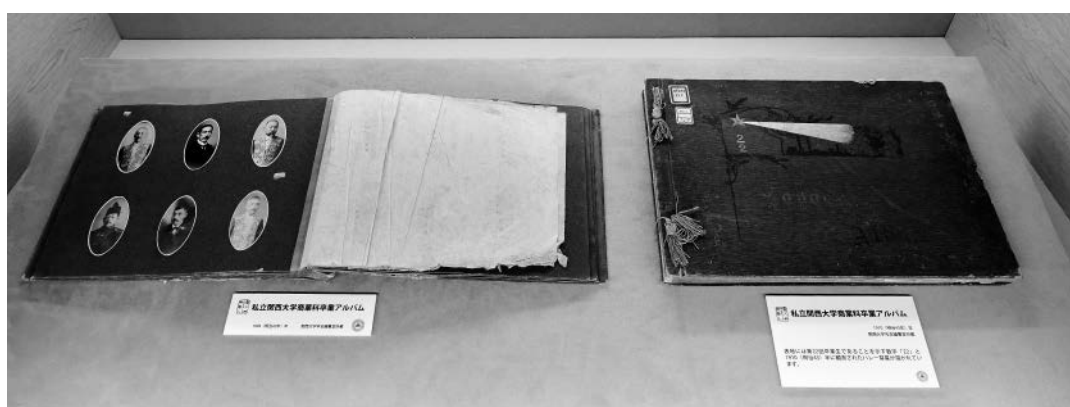
1889（明治22）年 関西大学年史編纂室所蔵
1889（明治22）年9月の第1回卒業生17名のうち、津島（内田）重成に授与された卒業証書です。小倉久、鶴見守義ら11名の講師が押印しています。

「旧制関西大学卒業証書」

1925（大正14）年 関西大学年史編纂室所蔵



関西法律学校の講義録



関西大学の卒業アルバム



関西大学の卒業証書

「関西法律学校第1回卒業記念写真」

1889（明治22）年 関西大学年史編纂室所蔵

関西法律学校の第1回卒業生は、上野良吾（武田宣英）、津島重成（内田重成）、小岸安昌ら17名でした。

「武田宣英『日本陪審法論』」

1928（昭和3）年 関西大学年史編纂室所蔵

武田宣英が関西大学へ提出した博士論文を有斐閣が刊行したものです。この論文により武田は関西大学の法学博士第1号となりました。

四 ボアソナード顕彰資料

ここでは帰仏後あるいは死後になされたボアソナード顕彰事業にかかわる資料を展示した。法政大学と明治大学による出品であるため内容の詳述は割愛するが、主な展示品には法政大学史センター所蔵「ボアソナード博士記念事業会関係資料」や明治大学史資料センター所蔵の伝ボアソナード使用「机」があった。

五 3大学のあゆみ

関西大学展で新設した「関西大学のあゆみ」「法政大学のあゆみ」「明治大学のあゆみ」コーナーでは、各大学担当者が創立期、旧制大学期、戦争期、新制大学期、学生運動期、現在の資料を独自に展示した。なお各大学の年表パネルと創立期の資料は巡回展示品である。



伝ボアソナード使用「机」



ボアソナード顕彰資料

「関西大学のあゆみ」展示資料

「関西法律学校規則」

1886（明治19）年 関西大学年史編纂室所蔵

創立時に発行された、関西法律学校最初の刊行物です。「関西法律学校設立の趣旨」「関西法律学校規則」「関西法律学校々員規則」の3部からなり、最後のページには創立者12名が名を連ねています。

（山野博史氏寄贈）

「関西法律学校の辞令書」

1900（明治33）年 関西大学年史編纂室所蔵

1897（明治30）年卒業の松山藤雄に副幹事を命じた辞令書です。

当初の給与は月額12円でした。

「大学設立認可申請書」

1921（大正10）年 関西大学年史編纂室所蔵

1921（大正10）年に財団法人関西大学が文部省に提出した申請書です。1年4か月後の1922（大正11）年6月5日付で認可を受け、大学令による大学（旧制）となりました。当時の設置学部は法学部と商学部です。2022（令和4）年6月5日に大学昇格100周年を迎えます。

「犬養毅の揮毫」

1923（大正12）年 関西大学年史編纂室所蔵

のちに総理大臣となる犬養毅は、通信大臣を務めていた1923（大正12）年4月19日に「学の実化」講座の講師として来学した際に「畏る所無し」と揮毫しました。当日の演題は「確固不動の信念を樹立せよ」でした。

「山岡順太郎肖像写真」

大正時代 山岡家所蔵

関西大学中興の祖である山岡順太郎は、総理事として1922（大正11）年の大学昇格（旧制）および千里山移転に尽力し、翌年からは第11代学長を務めています。さらに実業界で活躍してきた経験をもとに、今日まで継承されている理念「学の実化」を提唱しました。

「藤田嗣治 北村兼子像」

1929（昭和4）年 個人蔵

北村兼子は関西大学最初の女子学生です。1923（大正12）年10

月より聴講生として学び、在学中から朝日新聞記者としても活躍していました。本作品は、1929（昭和4）年に第11回万国婦人会議の日本代表としてドイツのベルリンを訪れた際、画家の藤田嗣治と知り合い、描かれました。

「山岡順太郎寿像」

1920（大正9）年 山岡家所蔵

大阪で活躍した実業家の矢野慶太郎と竹原友三郎が贈った、山岡順太郎の寿像です。彫金家中野美海の原型から、大阪で屈指の貴金属商山口金匠堂が作製しました。

「満州建設勤労奉仕隊感謝状」

1939（昭和14）年 関西大学年史編纂室所蔵

1939（昭和14）年の興亜青年勤労報国隊（満州建設勤労奉仕隊）参加に対する感謝状です。この満州派遣は全国の大学、高等専門学校、759名（指導教官含む）により編成され、関西大学からは法文学部10名、経商学部10名、予科5名、専門部5名の計30名が参加しました。

「予科生の墨蹟集」

1943（昭和18）年 関西大学年史編纂室所蔵

学徒出陣した予科学生32名が、予科学生部長であった八島治一教授に書き残した墨蹟集です

「スプーン、ナイフ、ケース」

昭和戦後 関西大学年史編纂室所蔵

学徒出陣した関西大学学生が、終戦後のシベリア抑留中に使用していました。ナイフと布製のケースは自作です。

（松崎知恵子氏寄贈）

「引き揚げ関係資料」

昭和戦後 関西大学年史編纂室所蔵

ソ連からの引揚者が日本への帰国時に使用したものです。松崎氏は約3年間のシベリア抑留を経て1948（昭和23）年にソ連のナホトカ港を出発し、舞鶴港へ上陸したのち東舞鶴駅から大阪へ戻りました。

〔展示品〕 引揚者乗車票、下車駅調査カード

「千里山花壇ポスター」

昭和戦前 関西大学年史編纂室所蔵

1921（大正10）年開業の千里山花壇は郊外の遊園地として人気を集めていましたが、1945（昭和20）年、軍需品の貯蔵施設となり一時休業しました。戦後に再開するも1950（昭和25）年に閉鎖され、その跡地を関西大学が取得しました。現在は社会学部、第一中学校、第一高等学校、幼稚園などが建っています。

「文学部受験票」

1949（昭和24）年 関西大学年史編纂室所蔵

「授業料等通知書・領収書」

1949（昭和24）年 関西大学年史編纂室所蔵

「新制大学期の記念品類」

昭和戦後 関西大学年史編纂室所蔵

関西大学は1948（昭和23）年3月25日に設置認可を受け、学校教育法による新制大学として発足しました。これにより法・文・経済・商の4学部が設置され、以来総合大学としての充実が図られてきました。

〔展示品〕 1948年大学祭記念胸章、1949年大学祭記念ネクタイ

ピン、1949年大学祭記念銀皿、1949年大学祭記念メダル、1949年大学祭招待券、1949年大学祭プログラム、関西大学創立70周年記念胸章

「1949年大学祭ポスター」

1949（昭和24）年 関西大学年史編纂室所蔵

1948（昭和23）年の新制大学発足後、第2回目の大学祭は大学院学舎と体育館の落成記念を兼ねて開催されました。

「創立80周年記念 関西大学学生歌募集ポスター」

1965（昭和40）年 関西大学年史編纂室所蔵

創立80周年記念事業の一環として学生、職員、校友から学生歌を募り、52編の応募のなかから校友明珍昇の作品が選ばれました。同年に記念事業の中心的事業として建設された関西大学会館は、4年後の学園紛争でバリケード封鎖の憂き目にあいます。



関西大学のあゆみ 創立期・旧制大学期



関西大学のあゆみ 戦争期・新制大学期

「学生運動関係のビラ」

1969（昭和44）年 関西大学年史編纂室所蔵

「校友会機関誌『関大』第167号付録（昭和44年6月28日）」

1969（昭和44）年 関西大学年史編纂室所蔵

「千里山守衛室勤務日誌」

1969（昭和44）年～1970（昭和45）年 関西大学年史編纂室所蔵

1969（昭和44）年6月1日から1970年4月30日までの守衛室勤務日誌です。関西大学における学園紛争の発端となった、1969年6月20日の関西大学学生会館封鎖当日の様子が記録されています。

写真パネル

写真1 バリケード封鎖された関西大学学生会館

写真2 大運動場で開かれた全学集会

「卒業記念 簡文館オルゴール」

1960年～1970年代 関西大学年史編纂室所蔵

簡文館の円形図書館と書庫（現存せず）をかたどったオルゴールです。書庫の屋根部分を開くと学歌のメロディが流れます。1960～70年ごろに頒布されていました。（麻生川章氏寄贈）

解説パネル「関西大学天六学舎体育館ウクレレ」

「天六学舎体育館ウクレレ」

2013（平成25）年 関西大学年史編纂室所蔵

天六学舎体育館の部材を用いて作られたウクレレです。天六学舎は1929（昭和4）年に竣工しました。戦後も主に夜間部の校舎として使用されていましたが2014（平成26）年に解体されました。

（美術家・伊達伸明氏制作）

「現在の関西大学グッズ」

平成 関西大学年史編纂室所蔵

「フィギュアスケート」コーナー展示資料

象徴的なスポーツ紹介として、関西大学ではフィギュアスケート関係資料を展示した。出品資料は全て個人蔵である。

「コスチューム」

2016～2017シーズンのフリースケート「組曲『惑星』」より映画『スターウォーズ』よりで宮原知子選手が着用したコスチュームです。

「宮原知子選手のスケート靴」

華麗な演技と流麗なステップを生み出したスケート靴です。

「平昌オリンピック ピンバッジ」

平昌オリンピックで宮原選手が集めた17種類のピンバッジがケース



関西大学のあゆみ 学生運動期・現在



関西大学のフィギュアスケート

の中に収められています。アメリカ、ドイツ、イスラエル、ラトビア、イタリア、中国など、参加各国のバッジのほか、フジテレビ（富士山）、テレビ朝日（ドラえもん）、NHK（どーもくん）、朝日新聞（鶴）など、マスコミ各社やスポンサー（ミズノ）のバッジも含まれます。ちなみに、イタリアのバッジは宮原選手が好きなカロリーナ・コストナー選手から、アメリカのバッジは長洲未来選手からもらったものです。

「世界選手権大会 銀メダル」

2015年3月、宮原知子選手が初めて出場したフィギュアスケート世界選手権大会（中国・上海）で獲得した銀メダルです。ショートプログラム（67・02点）、フリースケート（126・58点）ともに自己ベストを更新しました。

「コスチューム」

2014年、ソチオリンピックのショートプログラムで高橋大輔選手が着用したコスチュームです。

「高橋大輔選手のスケート靴」

豪快なジャンプや、世界一と言われる華麗なステップを生み出したスケート靴です。

「バンクーバーオリンピック 銅メダル」

2010年2月19日、バンクーバーオリンピック（カナダ）で高橋大輔選手が獲得した銅メダルです。フィギュアスケートでオリンピッ

クのメダルを獲得したのは、日本男子初の快挙でした。

「箱根駅伝」 コーナー解説パネル

象徴的なスポーツ展示として、法政大学と明治大学は合同で箱根駅伝についての紹介を行ったが、関西大学にも関係のある内容であったため解説パネルの文章のみ掲載する。解説文は明治大学史資料センターの阿部裕樹氏による。

「3大学と箱根駅伝」

お正月の風物詩となっている東京箱根間往復駅伝競走（箱根駅伝）は、1920（大正9）年に創始された大学生による駅伝競走です。2019（平成31）年大会で95回を数えます。

明治大学は第1回大会から、法政大学は第2回大会から参加している伝統校で、法政大学は79回で歴代4位、明治大学は60回で歴代10位の出場回数を誇ります（最多は中央大学の92回）。また明治大学は7回の総合優勝実績があります（歴代6位、最多は中央大学の14回）。しかし、最後の優勝は1949（昭和24）年の第25回大会であり、将来優勝すれば70年を超えるブランクを経ての優勝となります。これを上回る大学は第13回大会優勝の慶應義塾大学、第20回大会優勝の専修大学などわずかです。

一方の法政大学は総合優勝の経験こそありませんが、往路優勝と復路優勝を1度ずつ成し遂げ、近年では3年連続シード権を獲得するなどの飛躍を見せています。

関西大学は第9回大会（1928年）・第12回大会（1931年）・



法政大学のあゆみ



明治大学のあゆみ

第13回大会（1932年）に招待校として出場しています。初出場となった第9回大会では、8区の片淵昇選手が区間新記録の快走をみせるも総合9位（参加10校）でした。ちなみに同大会の優勝は明大で、法大は6位でした。その後片淵選手は明大に転学し、関大最後の出場となった第13回大会では明大の選手として6区（山下り）区間新記録の活躍をみせました。

写真1 第9回大会（1928年） 明治大学史資料センター所蔵

写真2 第2回大会を優勝した明治大学記念写真（1920年）

明治大学史資料センター所蔵

写真3 高橋旅館前に整列する法政大学駅伝選手たち（1936年）

法政大学史センター所蔵



大学と箱根駅伝

2019年7月9日に全国大学史資料協議会西日本部会2019年度第2回研究会が関西大学で開催され、北口由望（法政大学史センター）、村松玄太・阿部裕樹（明治大学史資料センター）、西村航（関西大学年史編集室）が巡回展示について講演を行った。その要旨は『全国大学史資料協議会西日本部会会報』第36号、2020年に掲載予定であり、本稿とともに参照いただきたい。

（年史編集室）

